

無意識のバイアスのコーナーができるまで

1. それは連絡会大規模アンケート報告書から始まった（2008年2月）

私と無意識のバイアス（Unconscious Bias）との出会いは、私が連絡会大規模アンケート報告書（第2回、2007年発行）を抱えて、2008年春に港区赤坂の米国大使館に押し掛けたところから始まった。当時、アメリカ大使館内には、米国科学財団（NSF）の日本出張所があった。出張所長、Machi Dilworth氏は米国籍の日本人で、NSFの官僚出身の方であった。私は、日本の女性研究者のどう見ても悲惨としか言えない現状を示して、先進的なアメリカの女性研究者支援事業、ADVANCEプログラムについて教えを乞いたいと伝えた。NSFやADVANCE関連の米国大学教員メンバーと親しく情報交換をする機会は、翌2009年2月、NSFと北大が企画した国際ワークショップで訪れた。その時、私は初めて“Unconscious Bias”という言葉を目にした。

2. きっかけはMachiさん、手ほどきはRankin先生（2009年2月～2011年春）

無意識のバイアスについて、実際に手ほどきをしてくださったのは、上記北大のワークショップで、Machiさんの紹介で知り合ったコロラド大学教授、Patricia Rankin先生であった。Rankin先生は、当時、ADVANCE傘下にあるコロラド大学のプログラム、LEAP (<https://www.colorado.edu/leap/women-faculty>) のリーダーであった。彼女は私が話した連絡会大規模アンケートのデータに大変興味を持ってくださり、「あなた方には、すでにデータがあるではないか！ すばらしいことだ。ただ、そのデータの背景の掘り起こしが不十分だと思う。また、そのデータの先に何を指すのか、それが見えていない！」と述べられた。今思えば、その時、私は彼女のことばを全く理解できていなかったと思う。

彼女は2009年の秋学期に、新たにスタートしたコロラド大学大学院の彼女の講義（WEB）に私たちを誘ってくれた。前半が**無意識のバイアス**、後半が**Leadership Development**。講義は15回×2、計30回、このWebinarは理解できないことも多

かったが、あとあと、無意識のバイアスの研究事例を自分で探す上で大きな助けになった。連絡会大規模アンケートと Machi さんと Rankin 先生が結びついていなかったら、日本における無意識のバイアスの理解は、もっともっと表層的でその場限りになっていたと思われる。

3. 集めた論文の数々と OIST の英語ツール作成、そして無意識のバイアスリーフレットと無意識のバイアス DVD 作成（2011 年春～2020 年）

Machi さんにプレゼントされた単行本、Beyond Bias and Barriers (The National Academies Press, 2007) と Rankin 先生の講義録を頼りに、文献探しが始まった。じきに U. Wisconsin-Madison 校の WISELI 出版のガイドブック”Searching for Excellence”に出会った。このガイドブックは全米の各大学のツール作成のモデルとなったものである。後々、リーフレットに掲載することになる論文のほとんどはこの時期に手に入れた。（インターネットがなければとてもこうは行かなかった）

2015 年になって、Machi さんが沖縄科学技術大学院大学（OIST）の副学長として赴任してこれ、私はその年の秋から翌春まで OIST の Gender Equality Division のツール作成作業に参加した。そのために、U. Washington と UCSF を訪問し情報収集も行った。結果が *“Striving for Excellence at OIST: Intervening to Minimize Bias in Faculty Recruitment”* である。

https://groups.oist.jp/sites/default/files/imce/u100221/【PDF】Unconscious%20Bias%20Training%20Tool_%20Striving%20for%20Excellence%20at%20OIST_OIST.pdf

2016 年に Machi さんは、OIST のツールをもとに、新しい情報も加えて第 14 回学協会連絡会シンポジウムで講演をされた。この講演録をもとに連絡会の「無意識のバイアス」リーフレットが誕生したのは、ご存知の通りである。このリーフレットは大学や学会で好評を博し、内閣府や JST の会議でも配布された。

今回の DVD、**"SEE BIAS and BLOCK BIAS"** は、先のリーフレットに書き込めなかった部分を付加し、さらに**無意識のバイアスをブロックするための好事例**にまで踏み込んだものである。

おわりに

教材用 DVD、**"SEE BIAS and BLOCK BIAS"**は、採用や昇進の人事選考におけるバイアスの働き方とそれに如何に対処するかについて、**現時点で得られる限りの知見**をまとめたものである。だが、このようなささやかな教材は、どのように貴重な内容であろうとも、放っておいて行き渡るものではない。連絡会所属の各学会への配信に加えて、結局、私自身も、知人、友人、先輩、後輩、大学参画室関係者、女性研究者 ML 等を総動員して、「どうぞ、視聴をおねがいします」と宣伝にこれ相務めた。嬉しいことに、教え子たちや後輩のそのまた後輩から「自分でも気づかないことに気づかされて勉強になった。知人にも知らせる」とコメントが届いた。同様の反応は、全国のあちこちで、ぽっぽっと野火のように揺れている。まだ数は少ないけれど、ようやく、DVD で意図した内容がしっかり伝わっていると確信できた。「無意識のバイアス」の灯火が、次々に多くの人をつないでくれて、大学や学会において、女性研究者の能力発揮の場が少しでも広がれば、というのが私の願いである。

最後にひとこと：視聴後のコメントの中に「米国ではなく日本の状況をもっと知りたかった」というのがあった。勿論、私も論文を探しつつ、どれだけそう思ったことか！ ただ、日本では無意識のバイアスと科学技術政策を結びつける研究はまだ進んでいない。米国の女性研究者支援事業の歴史は 40 年、日本はまだたった 15 年を過ぎたところである。日本の事例の蓄積と評価は今後の重要な課題である。

大坪久子

2021 年 新春